

大学講義における「まあ」

柳澤 浩哉・馮 文彦

Japanese filler “Maa” in university lectures

Hiroya YANAGISAWA, Wenyan FENG

キーワード：まあ，フィラー，大学講義，自然会話

1. はじめに

「まあ」については多くの先行研究があるが，取り上げられる用例・用法に偏りがあるため，重要性が高いと考えられるにもかかわらず，これまで言及されていない用法がある。さらに，量的観点からの研究が不十分なために，「まあ」の使用実態が必ずしも明らかにされていない。これらの問題を踏まえて，我々は自然会話（約 270 分）と大学講義（90 分×4，30 分×1）に見られる「まあ」の使用実態を調査し，従来指摘されていない複数の特徴を見出した。本稿ではその中から大学講義における「まあ」の使用実態を取り上げる。大学の講義では，予想外の場所に「まあ」が偏在するからである。本稿ではその実態を明らかにした後，その原因を自然会話の用例を手がかりに明らかにしていく。そこから明らかになるのは，発話者の態度を表示する「まあ」の機能であるが，先行研究の興味は「まあ」の意味規定に集中していたため，「まあ」のこのような側面に注目した先行研究もほとんどないと思われる。

2. 先行研究

「まあ」についての先行研究として川上 (1993, 1994)，富樫 (2002)，小出 (2007)，川田 (2007)，大工原 (2010)，山田 (2013) などが挙げられる。

川田 (2007) は話し手の情報独占に注目し，「フィラー」とそれ以外の「まあ」を分ける。川田 (2007) は，「まあ」を「ヘッジ」，「フィラー」，「情動的感動詞」の三つに分類し，そのうち，ヘッジとフィラーの「まあ」は話し手が談話の中で聞き手と共有していない情報を提供する時に現れるのに対し，情動的感動詞としての「まあ」は聞き手と情報が共有されうる環境で現れると指摘している¹⁾。

(1) B：太郎は去年東大を卒業してからというものの音沙汰がないんです。

A：|？？まあ h/まあ j|，太郎は東大に行ってい

たのですか？

B：そうですよ。知りませんでしたか？

(川田 2007)

この例(1)では，Aが「太郎は去年東大を卒業した」ということを聞いた時点で，Bと情報を共有する状態になるため，ここで情動的感動詞としての「まあ」は発せられるがヘッジとしての「まあ」は発せられないと述べる。

川田 (2007) 以外の研究は，「曖昧性」に着目するものと「複数の選択肢がある」に着目するものがある。

曖昧性に着目する論文として，川上 (1993, 1994)，富樫 (2002) などが挙げられる。川上 (1993, 1994) は，「まあ」を発話の冒頭に位置する「応答型用法」と発話中の文頭・文中に位置する「展開型用法」に分け，「応答型用法」は「話し手と聞き手とが相互に相手の発話に反応しあい，… (中略) 相手の発話内容に対する受け取り方を表示しつつ，自分の発話内容を展開させていく用法」で，「展開型用法」は「自分の主張・見解をいかに展開させて聞き手に伝えるかに焦点がある」と述べる。また，この 2 種類の用法の出現位置として，「応答型用法」は発話の冒頭に位置し，「展開型用法」は発話中の文頭及び文中に位置すると指摘している。

(2) A：だって，俺，おまえ，金パーやで。

B：まあ，そや，えらい損やわけな。

(川上 1993)

(3) リンゴ：どんな内容ですか？

林アナ：エー，まあ，主婦のみなさんのパートなんです，労働省の調査によりますとですねえ，共働きの世帯とそうでない世帯を上回ったんですね。

(川上 1994)

(2)の「まあ」は，BがAの発話を受けつつ，Aのことを考慮して消極的ながら同意を示すもので，典型的な応答型用法である。それに対して(3)はこれから話す内

容について、「おおまかにいえば」、「考えてみるに」、
「そもそも」といったような姿勢を示し、自分の発話を展開する「まあ」であるとしている。

富樫（2002）は「まあ」の使用条件、出現位置、そして独り言の発話を観察し、「まあ」の機能を以下のようにまとめている。「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す、あるいは計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す」。ここでの曖昧性は、計算処理の結果ではなく、計算処理の過程（前提）の曖昧であると富樫は主張する。

(4)1980 円に消費税だから、**まあ**、2100 円くらいかな。

（富樫 2002）

(4)は典型的な「計算処理過程の曖昧性」を表す「まあ」である。ここの「まあ」は「ちゃんとした計算ができず、正確な答えを導き出していないこと」を示すと富樫（2002）は指摘している。

(5)（ケンカをしている二人の間に割って入って）

まあ、まあ、まあ、落ち着いて。（富樫 2002）

(6)A：いや、このような立派なものは受け取りません。

B：**まあ、まあ、まあ**、そんなこと言わずに。

（富樫 2002）

(5)、(6)のような相手に対しての働きかけを示す「まあ」は、相手が否定的・消極的な態度を取る時によく現れる。このような「まあ」は、相手の態度に対して、「なだめる」「和らげる」「やんわりと否定する」といった反応を表すと富樫は述べている。

一方、複数の選択肢があることに着目するものとして、大工原（2010）、山田（2013）がある。大工原（2010）では「まあ」の用法を大きく「但し書き用法」と「強調的用法」に分け、但し書き用法の音調は高低に対し、強調的用法の音調は低高で延伸を伴って発音されると指摘し、但し書きの用法が示すのは話し手の「心内のわだかまり」であると主張する。

(7)日本でリンゴといたら、**まあ**青森ですよ。

（大工原 2010）

ここでの「まあ」は「強いていうと長野や岩手も有名ですけど」という心内のわだかまりを伝える②。

山田（2013）は「『まあ』は暫定的態度の表明・曖昧性の標識」という仮説を立てている。その核となるのは、やはり複数の選択肢があるということである。

(8)もし、卒論とかね、3年次論文でやるんだったら、ゼミの先生に、アノー**マア**聞くのがいいと思うけど…（以下省略）

（山田 2013）

この例(8)の心内プロセスについて、山田（2013）は以下のように説明している。まず話し手は自分の心的データベースで、適切な表現を検索し、その複数の検索結果（例えば a. 聞く b. 相談する c. 教えてもらう d. ……）が心的バッファに表示される。話し手がその中の1つを選んだ場合に（例（8）の場合は a. 聞く）、
「まあ」が現れるのである。

小出（2007）は「曖昧性」に着目するものと「複数の選択肢がある」に着目するものの中間に位置すると考えられる。小出（2007）は副詞としての「まあ」とフィラーとしての「まあ」を分けて考えている。

(9)このデザイン、**まあ**好きです。

(10)**まあ**なんとかやっています。

(11)**まあ**いいか。

(12)この分じゃ、**まあ**誰も来ないね。

(13)文句を言わず、**まあ**食べてごらん。

(14)それじゃ、**まあ**説明しよう。（小出 2007）

(9)～(14)は用言を修飾するもののため、小出（2007）では副詞として扱っている。フィラーとしての「まあ」は、例(15)のようなものである。

(15) 楽しい予定、へへ、ですか？

(1：ええ)そうですね、え、**まあ**はっきりしないんですけど、ちょっと友達と東南アジアの方に、旅行に、行きたいなって話があります。

（小出 2007）

フィラーの認定基準として、小出は①取り去っても伝達内容、伝達姿勢に関する情報に増減がない②他のフィラー「えー」「うーん」などと置き換えが可能である③繰り返し現れても、文意に影響しない④述部以外の要素を取り去ると不自然な文になるこの4つの条件満たさなければならない。これらの内容を踏まえ、小出は「まあ」の用法を以下のようにまとめた。

用法名	モニター対象	「まあ」の意味	品詞性
副詞	命題	選択の暫定性	A d
注釈	発話	内容の暫定性	F
例示	知識	例の暫定性/代表性	F
見解	状況	見解の暫定性/確実性	F / D M?
引用	相手発話	許容の暫定性	A d / F / DM
区切り	談話	区切りの暫定性	F/DM

（A dは副詞、Fはフィラー、DMは談話標識を示す。）

「まあ」の意味において、キーワードとされている暫定性は、小出（2007）によれば、「いくつかの選択肢の中から、厳密な検討を経ることなく、とりあえず選択されたものである。」この説明は「曖昧性」と重なる。小出（2007）は「曖昧性」と「複数の選択肢がある」の両方を重視するものだと考えられる。

3. 先行研究のまとめ

先行研究の興味は「まあ」の意味規定に集中しており、提案された複数の意味規定は、「曖昧性」あるいは「複数の選択肢がある」のいずれかにまとめられると思われる。ただし、「曖昧性」と「複数の選択肢がある」は根本的に異なるものではなく、焦点をあてる場所による違いとして理解可能である。比較的早い時期に「まあ」の意味規定を試みた森山（1989）の「色々な問題にこだわらないという発話の意味が基本」という捉え方と核となる部分を共有しながら、多様性を明らかにしてきたと理解できると思う。そのため、かなり乱暴であるが、「まあ」の意味規定に対する先行研究の結論を、本稿では川上（1993）の言葉をかりて概言³⁾という言葉でまとめてみたい⁴⁾。

4. 先行研究の問題

先行研究では「まあ」の様々な用法や意味が検討されているが、先行研究には、用例選択の偏り、用例の量的検討不足という二つの問題点を指摘できる。

- ① 用例選択に偏り（不足）があり「まあ」の用法が必ずしも網羅されていない。
- ② ある程度の時間におよぶ自然会話を量的に調査した研究が乏しい。「まあ」を量的に調査した研究はあるものの、他のフィラーとの出現数の比較に留まり、「まあ」の出現しやすい条件を解明するような検討はなされていない。

①について補足したい。先行研究において漏れている用法として、例えば、「メタ言語化」と「尊大な印象」をあげることができる。この二つを簡単に説明してみたい。メタ言語化とは次のような例である。

(16) まあ、冗談だけど。

(16)は、それ以前の自分の発言を「冗談」に変えるメタ言語になっている。フィラーをつけない(17)であっても、それがメタ言語であることは内容から判断できるが、「まあ」をつけた(16)は、よりメタ言語らしくみえる。

(17) 冗談だけど。

さらに、「まあ」以外のフィラーを付けた(18)のような

形は、言い難さが前面に出た、強い遠慮を感じさせる発言となる⁵⁾。

(18) あの、冗談だけど。

「まあ」には、メタ言語発言をよりメタ言語らしく感じさせる用法がある。フィラーの中でこの用法を認められるのは「まあ」だけであり、この用法を無視して「まあ」の性格は考えられないと思うが、先行研究でこの用法に言及したものはない。概言とメタ言語の間に自然なつながりを見いだせないため、これを概言から説明することは困難だと思われる。

次に尊大を考えてみたい。尊大は「まあ」に感じる素朴な印象であるが、尊大が生まれるメカニズムについても踏み込んだ研究はないようである。

(19) 分かりました。

(20) まあ分かりました。

(19)にマイナスの印象はないが、(20)は不満な印象を強く感じさせ、目上の人間に使うことはまず不可能である。一見、この印象は概言という意味から簡単に説明できそうに見える。「まあ」の伝えるわだかまりが不満や尊大の印象を作る、といった説明である。だが、(19)にわだかまりを伝える語を加えた(21)、(22)に、(20)と同程度の不満や尊大を感じるだろうか。

(21) だいたい分かりました。

(22) おおよそ分かりました。

許容度の違いは次のように言い換える事でより鮮明になる（順序を変えて提示する）。

(22)' おおよそ分かりました。次のような理解でよろしいでしょうか。

(21)' だいたい分かりました。次のような理解でよろしいでしょうか。

(20)' まあ分かりました。次のような理解でよろしいでしょうか。

(22)に無礼な印象はないが、(21)'には多少ぞんざいな印象を受けるかもしれない。とはいえ、(22)'と(21)'はどちらも目上の人間への使用が可能だと思われる。それに対し、(20)'は不満を露骨に表明した言い方となり、人間関係の破壊でも意図しない限り、目上の人への使用は不可能だろう⁶⁾。概言では説明しきれない不満や尊大を「まあ」が感じさせることが確認できる。「まあ」に尊大（不満）の意味が不可分なことは、「まあ」と謙譲語が共起できないことから分かる。

(23) ?? まあ、承知いたしました。

(24) ?? まあ、お伺いいたします。

(25) ?? まあ、説明させていただきます。

「まあ」と謙譲語との強い反発は、その印象が「まあ」

の中心的意味と深くかかわることを予想させる。「まあ」については、概言という意味とともに、メタ言語化の用法、尊大（不満）の印象までを統一的に説明できる原理が必要である。我々はこれら全てを統一的に説明できる仮説を構想しており（概言とは異なる原理である）、これを考える前段階として、「まあ」の量的な問題を扱ってみたい。

5. 大学講義における「まあ」

「まあ」を量的に調査した先行研究は複数あるが、多くの研究は他のフィラーとの出現回数の単純比較で終わっており、共起関係や出現条件などを考慮した量的調査はわずかである。「まあ」の出現を他の要素・要因との関連を踏まえて調査した研究として、例えば、発話交替時に出現するフィラーを調査し、発話交替にかかわる「まあ」が少ないことを明らかにした研究⁷⁾、フィラーの連続を調査し、「あの、まあ」のような形で「まあ」が他のフィラーと連続しやすいことを明らかにした研究⁸⁾などをあげることができる。だが、残念なことに、いずれの論文でもそこから「まあ」の新しい性格を導く論は展開されていない。

我々は、長時間におよぶ自然会話と大学の講義を録音し、「まあ」の出現しやすい条件を探した。自然会話に加えて大学講義を選んだのは、先行研究が自然会話かそれに近いものをもっぱら使っているからである。自然会話と対照的な大学講義を見る事で、新たな特質を発見したいと考えた。録音した資料のそれぞれの時間は次の通りである。

自然会話：15分×18組、約270分。

大学講義：90分×4、30分×1、約450分。

両方の資料に記録された「まあ」について、共起しやすい語や表現、出現しやすい発話内の位置、出現しやすい発話の流れ（文脈）、出現を抑える条件など、思いつく限りの要素・条件と「まあ」の相関を検討した。「まあ」の現れ方は、自然会話と大学講義で大きく異なっており、特に大学講義での「まあ」が予想外の分布を見せる。本稿では大学講義における「まあ」の偏った分布を明らかにし、その原因を考察してみたい⁹⁾。

講義の「まあ」について、まず注目したのは内容との関係である。具体的には、学生へのアピール（強調など）、授業内容（中心的内容と補足説明など）、授業内の位置（開始部・統括部など）と「まあ」の関係に注目したが、それらと「まあ」の間に特別な相関は見られなかった。だが、一つだけ、「まあ」との間に高い相関が見られる条件があった。講義の「まあ」はA、Bのい

ずれかの場合に高い頻度で現れる。

A 自分の体験を語る中

B 「思う」「考える」に続く発言

どちらも全く予想外の条件だったが、A・Bのいずれにおいても「まあ」が高い頻度で出現している。AとBはともに自分の内面を語る点で共通するため、両者を合わせて「自分語り」と呼ぶことにする。調査した5つの講義全てで、「まあ」が「自分語り」に集中しており、6割以上の「まあ」が「自分語り」に集中している講義が2つもある。表1をご覧ください。

表1 「自分語り」の「まあ」¹⁰⁾

	「まあ」 の全体数	「自分語り」 の「まあ」	「自分語り」 の割合
講義A	90	54	60.0%
講義B	8	5	62.5%
講義C	176	50	28.4%
講義D	102	39	38.2%
講義E	20	10	50.0%

表1を見ると、「まあ」の総数、および「自分語り」への偏在傾向の両方で講義間に大きな差のあることがわかる。まず、「自分語り」への偏在が最も低い28.4%という数値について確認しておきたい。この数値だけを取り出すと、あまり高くないと思えるかもしれない。だが、もしも講義時間の28.4%を「自分語り」に費やす講義があったとすれば、それは講師が自分のことばかりを話す異様な講義になるだろう。言うまでもなく、調査した5つの授業の中にそのような講義は存在せず、全ての講義で「自分語り」の時間は短く抑えられていた。最も低い28.4%という数字ですら高い集中を示していることは明らかで、それ以外の講義における「自分語り」への集中が極めて顕著なことが分かる。

次に、総数の違いについて考えたい。「まあ」の総数に大きな開きがあることから、「まあ」が講義において選択自由な言語要素であることが分かる。「まあ」を沢山使っても使わなくても、講義らしい語り口は崩れないということである。注目したいのは、「まあ」の総数と「自分語り」における割合との間に逆相関の関係が成立していることである。例えば、「自分語り」の「まあ」割合が4割を下回るのは、総数が100を超える講義だけである。この逆相関が示しているのは次の事実だと考えられる。

「自分語り」には「まあ」の出現を促す強い力があり、その力は「まあ」の使用を抑制している講義、「まあ」を多用する講義のいずれでも出現する。その結果、「まあ」の抑制が強い講義ほど「自分語り」における「まあ」の割合が高くなる。

では、「まあ」の出現を促す「自分語り」の力とは一体何か。まず、「自分語り」の中から「まあ」「ま」が出現する例文を引用してみよう。(26)から(27)は自分の体験を語ったもの。(29)から(31)は「思う」「考える」と共起するもの。(28)は両方に該当する例である。

(26) 今思い返してみると、その一僕が大学を受ける時、の、**ま**、キーワードっていうのが、**ま**先生にはちょっとなりたかった、ですね。ですから教育っていうのと、**まあ**言葉に興味があつて、**まあ**、とか日本語とか国語は好きだった。

(27) えー、よく、七回、八回、頑張ってきました。**ま**いろんな景色の、授業がありまして、全国、あ、全国じゃなくて、広島県の中学校社会科の研究大会にも出ていただいて、(後略)

(28) それがあの一、**ま**日本的な説得っていうものの、一つ、多分柱だと思います。**ま**、そんな論文を昔書いたことがあります。

(29) えー、今日と来週1時限目でお話しするのはワイマール期の政治と社会というところで、**まあ**大衆の、えー苦悩の大衆民主主義と国際情勢、で今日は国際情勢というところを、**まあ**あの一、中心にやって行こうかなというふうに考えています。

(30) で皆さんレポート書く時も、**ま**、同じ、に一問題に、直面するのではないかと思います。

(31) でもそういう普段、当たり前のようにしていること話していること、空気のような存在の言葉とか文化というものを、**ま**これこの授業通しての、あの共通してるテーマだと思うんですけども、そういう外の面によって築かされるわけですね。

これらの例文から、「自分語り」と「まあ」のつながりの一端が推測できそうにも見える。先ほど、メタ言語では「まあ」のある方が自然なことを指摘した。上の例文の(27)と(31)には、メタ言語と通底する「まあ」が指摘できる。どちらも俯瞰的視点から話題に対するコメントが含まれているからである(ただしメタ言語にはなっていない)。具体的に見ていこう。(27)の「**ま**いろんな景色の、授業がありまして」という挿入節は、ここでの話題である授業参観の体験を俯瞰的に振り返って得られる感想である。また、(31)の中心

的話題は文化の性質であり、「**ま**これこの授業通しての、あの共通してるテーマだと思うんですけども」という挿入節は、授業計画という広い観点からの補足である。どちらも、「まあ」「ま」に導かれて俯瞰的なコメントが登場しており、これはメタ言語の「まあ」と通底すると言えそうである。だが、メタ言語と「自分語り」は全く異なる観点からの区分であり、「自分語り」の一部にメタ言語に似たコメントがあったとしても、そこから「自分語り」全体に通じる性質を取り出すことは困難だろう。「自分語り」の持つ「まあ」を引き寄せる力を説明するには、もっと別な角度からの説明が必要である。自然会話の例文を手掛かりに、その力を考えてみたい。

6. 自然会話における「まあ」

講義では「自分語り」をある程度の客観性を持って特定することができる。客観性の重視される講義においては、主観を述べる「自分語り」が特別な語りになるからである。だが、講義と自然会話では主観性に対する事情が全く異なる。自然会話では、濃淡の差はあるものの、全ての発言が自分の意見や体験を語る「自分語り」である。したがって、自然会話を素材に「自分語り」を考えるには特別な工夫が必要になるだろう。

我々はまず、自然会話における「まあ」の出現条件を考えるため、客観的に区別可能な特徴から調べることにした。客観的な区別が可能で、「まあ」の出現条件を考える手がかりになりそうな6つの用法を選び、その内訳を整理したのが表2と表3である。「まあ」の用例をカウントした6つの用法は以下である。

逆接：「まあ」の前または「まあ」の後に逆接の接続詞・接続助詞が出現する例。(本稿では、逆接の接続詞・接続助詞を逆接語としてまとめた。また、一続きと認められれば、逆接語と「まあ」の間が離れている例も含めた。)

順接：「逆接」の逆接語を順接語に置き換えた例。

譲歩：「まあ」の前後の譲歩のある例。

思う：「まあ」の後に「思う」が出現する例。(一続きと認められれば、「まあ」と「思う」との間が離れている例も含めた。)

体験：自分の体験を再現する中に出現する「まあ」。

体験に対する感想や意見、他者の体験の再現等は除外する。

あいづち：あいづちと認められる「まあ」。

表2 教師と学生との会話¹¹⁾

逆接	73 (38.8%)
順接	19 (10.1%)
譲歩	0 (0%)
思う	23 (12.2%)
体験	35 (18.6%)
あいづち	5 (2.7%)
その他	87 (46.3%)
用法数合計	242
出現数合計	188 (128.7%)

表3 学生と学生との会話

逆接	19 (30.6%)
順接	4 (6.5%)
譲歩	1 (1.6%)
思う	4 (6.5%)
体験	10 (16.1%)
あいづち	10 (16.1%)
その他	25 (40.3%)
用法数合計	78
出現数合計	62 (117.7%)

二つの表の総数に大きな違いがあることから、「まあ」が相手意識に影響される要素であることが分かる。また、どちらの表でも逆接の割合が突出しているため、逆接と共起する「まあ」が、「まあ」の特別な性質を発見するための鍵を握っているように思える。我々は当初、「自分語り」が「まあ」を引き付ける力を、逆接との共起から見出そうと試みた。しかし、逆接と共起する「まあ」を複数の角度から検討したものの、「自分語り」を考える手がかりは見当たらなかった。最終的に、量的な方向での検討をあきらめ、質的な方向での検討を行うことにした。「自分語り」と「まあ」のつながりを示す用例の発見である。

自然会話は全ての発言が「自分語り」であることは、先に述べた通りであるが、その中でも特に自分を強く意識した時に「まあ」の頻度が高くなる傾向がある。例えば(32)を見て欲しい。そこでは、教師に自分の専門を聞かれた学生が、照れながら、あるいは恐縮しながらそれに答えている。(Tは教師、Sは学生)

(32) T 専門は何ですか。

S 専門。**まあ**専門というか。とはまだ言えないんですけど、はい。

T あのう論文書こうと思ってるテーマ。

S は、音声、で。

(33)も教師と学生の会話であり、教師に将来を尋ねられた学生が、国語教師であると答えた後、さらにその具体的なイメージを語る場面である。

(33) S あの国語の先生って、

T はい。

S 文学志向だと思いますけど、

T はいはい。

S えー。

S **まあ**いろんな視野を持った、

T ふーんー

S 国語の先生に成れたらなって、思います。

T あー、そうなんですか。

(32)と(33)は、どちらも学生に照れが感じられる。彼らが照れているのは自分の内面を語る、恥ずかしさを感じるような内容だからだろう。次の(34)は学生同士の会話である。日本語教師を目指す二人の学生がこれから書く修士論文を話題にしている。

(34) A なんか詳しく研究する力がありますよ、つてのを証明するためのものとして

B うんうん。

A その修士論文が書ければ、

B うん。

A いいと思うからって。

B うん。なるほどね。

A **まあ**でもそう考えたら日本語教師としてのあれはあんま関係ないな、つて。

B うんうん。**まあ**現場に直接さあ、なんか役立つものつて。

A うんー

B うーん

A 直接的には難しいよね。

(34)では二人の学生が修士論文に対する本音を語る中で「まあ」が現われている。これも内面を語る時に現れた「まあ」と言っていいたいだろう。次の(35)は、大学教師が学生に、自分の親戚に中国系の人のいることを伝える場面である。

(35) T 一部の者が

S はい。

T あの一中国系なんですよ。

S あーそうなんですか。

T ええ。あのう今は、マレーシアとシンガポールに、

S はい、はい、はい、はい。

T いるんですけど。**まあ**単なる、遠い、遠い親

戚というだけですけど。

S あ、はい。

T 僕自身は、あのーもっばら日本で育ったんですけどね。

S あー、そうなんですか。

T でも**まあ**、あのー、精神的になんとなくその、中国系の人にあの、親しみを感じるという、そういう環境で。

(35)では、自慢に聞こえないように気を付けながら、話している印象を受ける。このような場所に「まあ」が表れやすいのは直観的にも納得しやすい。例えば次のような例（作例）である。

(36) **まあ**、こんなことを言うと、自慢みたいで嫌なんです。

また、本心を明かす時に「まあ」が表れやすいことは、例えば (37) のような例（作例）からも納得できる。

(37) **まあ**、はっきり申し上げて・・・。

(36)や(37)の「まあ」が伝えるのは、命題内容ではなく、発話態度に関わる情報であり、あえて言葉にすれば、躊躇となるかもしれない。だが、躊躇であれば「あのー」や「えーと」など、他のフィラーでも表現できるはずである。(36)や(37)において、「まあ」を他のフィラーに置き換えられないのは（置き換えると恐縮や強い遠慮という印象が加わってしまう）、発言内容に対する自信の表現に違いがあるからである。「あのー」や「えーと」は躊躇とともに発言内容に対する自信の欠如を表現するが、「まあ」は自信の欠如を表現しない。なお、(37)の「まあ」が躊躇よりも自信を感じさせるのは、「はっきり申し上げて」という自信のある言葉が、「まあ」の印象を躊躇から思慮（十分検討した）に変えるためだと考えられる。

7. 結論

講義の「まあ」は「自分語り」に集中していた。講義において「自分語り」が「まあ」を引き付ける力の正体は何か。これを自然会話の用例を手がかりに解明することが本稿の課題であった。これを考えるために、講義の一般的性質を考えてみたい。

大学の講義は「教える場」であり、客観的に認められていること、定説や事実を話すことが基本である。もちろん、あえて定説以外を語ることもあるだろうが、その場合には信憑性や客観性についての断りが求められるはずである。このような講義の性質を考えれば、講師が自分の体験や個人的見解を語る「自分語り」は、講義に相応しくない内容の典型となるだろう。そのこ

とは講師自身も分かっているはずで、自分を語ることへの抵抗感（緊張、恥ずかしさ、場合によっては快感など）が、その行為の特殊性を表示する言語形式を要求してくると思われる。これは、自信のなさが「あのー」を要求し、検索が「えーと」を要求するような無意識のものである。そして、この要求に一語で応えられるのが「まあ」なのではないか。

自然会話では、照れながら自分のことを話す、自分の内面を語るといった場面で「まあ」がしばしば現れる。「まあ」のこの用法が、「自分語り」の作る抵抗感の表現に相応しい言語形式なのだと考えられる。「あのー」や「えーと」などのフィラーは、躊躇とともに自信の欠如を伝えてしまう。「自分語り」は、講義に相応しくないことを承知の上で敢えて語るものだから、講師はその内容に強い必要性を感じているはずで、自信の欠如とは相容れず、「まあ」が相応しい形式になると考えられる。ただし、「自分語り」は他のフィラーを排除するわけではなく、「まあ」とともに他のフィラーも出現している。この現象は、自然会話で自分の内面を語る時などにも見られる。

本稿の出発点は、先行研究で不足している量的な視点からの「まあ」の検討であった。講義における特徴的な「まあ」の用法を説明できるのは、発話態度とのかかわりであるが、「まあ」が発話態度を表示することは、先行研究においてほとんど言及がない。また、「まあ」が発話内容に対する自信の欠如を表現しないことは、他のフィラーとの決定的な違いと考えられるが、この点に言及した先行研究も見当たらない。さらに、概言に代表される先行研究での指摘と、本稿で明らかにした発話態度や自信の表現を、どのような原理から統一的に説明すべきなのか。我々はこれらの問題を説明できる仮説を構想しており、「まあ」の統一的な説明は稿を改めて論じてみたい。

注

1) 川田 (2007) では、ヘッジの「まあ」を「まあh」、情動的感動詞の「まあ」を「まあj」、フィラーの「まあ」を「まあf」で表記する。

2) 大工原 (2010) が指摘している強調的用法の「まあ」は、出現形式は但し書きの用法の「まあ」とは同じだが、発音は低高型で、延伸を伴って発音する。この二つの用法を区別するため、大工原 (2010) は但し書きの用法を「まあ」、強調的用法を「まあー」で表記する。

日本でリンゴといたら、**まあー**青森ですよ。

(大工原 2010)

この例においての「まあ」は強調的用法で、但し書きの用法の「まあ」とは違って、内心のわだかまりを含意せず、逆に「ともかく青森だ」という発話者の強い主張を聞き手に示していると大工原は指摘している。

3) 川上 (1993) では「概言」を「いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べる」と定義している。

4) 以上の先行研究とは異なり、魏 (2015) は「まあ」の中心的意味ではなく、「まあ」の待遇差の有無について調査を行った。魏 (2015) はフィラーの「まあ」を統語的な「まあ」と談話的な「まあ」の2種類に分け、統語的な「まあ」は「文の構造、文の構成にかかわり、統語レベルの面から考察する『ま (一) 』」で、談話的な「まあ」は「発話者が発話を進めるために、質問したり、発話権を取るために、主題を提示したり、たま、相手に応じて、答えたりするストラテジーを使うもので、談話運営の面から考察する『ま (一) 』」である。考察の結果として、統語的な「まあ」は直前の内容の独立度が高い場合に待遇性が反映されるにに対し、談話的な「まあ」は直前の内容が談話運営を発話者にとって有利に進める機能を果たす場合に待遇差が反映されると述べている。

5) 「まあ、冗談だけど」「冗談だけど」「あの、冗談だけど」について、日本語母語話者7人 (50代日本語教師一人、50代会社員一人、20代会社員二人、20代大学院生二人、20代大学生一人) にその自然度を五段階評価をさせてもらった。(1はとても不自然、5はとても自然) その結果、「まあ、冗談だけど」の平均自然度は4.71、「冗談だけど」は3.57、「あの、冗談だけど」は3.14である。「まあ、冗談だけど」は「とても自然」という感想に対して、「冗談だけど」は「なんか冷たい」、「物足りない感じ」、「あの、冗談だけど」は「相手が冗談を真に受けていた感じ」というコメントが多かった。

6) 「まあ、分かりました」「だいたい分かりました」「おおよそ分かりました」も同じく母語話者7人に五段階評価で調査した結果、「まあ、分かりました」の平均自然度は1.43、「だいたい分かりました」は3.14、「おおよそ分かりました」は4.29である。「まあ、分かりました」の許容度の低さが確認できる。

7) 磯野英治, 上仲淳 (2016)

8) 山根智恵 (2002)

9) 本稿では「まあ」と「ま」を区別せずに「まあ」として扱った。両者の用例に特別な使い分けが認められず、区別しない方が「まあ」の性質を把握しやすいと判

断したためである。

10) 講義Bのみ、講師の話が30分で終了している。

11) 内訳数には重複があるため合計が100%を越える。

参考文献

- 魏春娥 (2015) 談話におけるフィラー『ま(一)』の待遇差に関する予備的考察, 『東アジア研究』 (13), pp. 75-93.
- 磯野英治, 上仲淳 (2016) 日本語学習者がターン交替時に使用するディスコースマーカー: 日本語母語話者との比較, 『日本語研究』 (36), pp.87-95.
- 川上恭子 (1993) 談話における「まあ」の用法と機能 (1): 応答型用法の分類, 『園田国文』 14, pp.69-78.
- 川上恭子 (1994) 談話における「まあ」の用法と機能 (2): 展開型用法の分類, 『園田国文』 15, pp. 69-79.
- 川田拓也 (2007) 日本語談話における「まあ」の役割と機能について, 『言語学と日本語教育』 V, pp.175-192.
- 小出慶一 (1983) 言いよどみ, 『講座日本語の表現[3]話しことばの表現』 筑摩書房.
- 野村美穂子 (1996) 大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語-『フィラー』に注目して-, 『文教大学教育研究所紀要』 5, pp.91-99.
- 定延利之 (2016) 『コミュニケーションへの言語的接近』 ひつじ書房
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版.
- 大工原勇人 (2010) 日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究: フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて, 神戸大学博士学位論文
- 富樫純一 (2002) 談話標識「まあ」について, 『筑波日本語研究』 7, pp.15-31.
- 森山拓郎 (1989) 応答と管理システム, 『阪大日本語研究』 (1), pp. 63-88.
- 山田葵 (2013) 自然談話における「マア」の使用について: 談話上の機能と話し手の情報処理のプロセス, 『南山言語科学』 (8), pp.295-312.